

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に  
 B6判  
 三五二頁  
 三五〇〇円  
 必須の知識をすべて網羅！  
 初心者から研究者まで使え  
 る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
 思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
 景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
 〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
 鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
 高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円  
**俳句鑑賞辞典**  
 貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
**現代俳句鑑賞辞典**  
 結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
**季語辞典**  
 日本の季節によつたる言葉やスモッグ・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から緻密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
**難解季語辞典**  
 古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

俳句文学館蔵書

- 国語学大辞典 B5 一〇〇〇〇円
- 国語慣用句大辞典 A5 八〇〇〇円
- 国語慣用句辞典 B5 二〇〇〇円
- 国語史辞典 B5 二〇〇〇円
- 日本語 語源辞典 B5 一八〇〇円
- 京都語辞典 B5 一八〇〇円
- 擬音語擬態語辞典 B5 一八〇〇円
- 隠語辞典 B5 一八〇〇円
- 近世上方語辞典 B5 一八〇〇円
- 花柳風俗語辞典 B5 一八〇〇円
- 明治新語俗語辞典 B5 一八〇〇円
- 難訓辞典 B5 一八〇〇円
- 名乗辞典 B5 一八〇〇円
- 名数数詞辞典 B5 一八〇〇円
- あいさつ語辞典 B5 一八〇〇円
- 新版ことば遊び辞典 B5 一八〇〇円
- 類語辞典 B5 一八〇〇円
- 類義語辞典 B5 一八〇〇円
- 表現類語辞典 B5 一八〇〇円
- 新文章表現辞典 B5 一八〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-233-3741-2

# 連句 第25 季刊



恋句は三句去り（南柏雑記 23）	1
えにし	2
「鳶の羽も」の巻 鑑賞（IV）	4
A・C・C実作歌仙二巻	10

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第二十九回 猫蓑会 14

第一部 正式俳諧興行 (一) 役割 (二) 次第

二十韻 捌・文 杉江杉亭

第二部 二十韻九巻 捌 東 明雅・上月淳子・式田和子  
副島久美子・豊田好敏・中田あかり  
馬場彬風・原田千町・吉沢てるよ

歌膝 秋元 正江 19

幸せと連句 中島 啓世 20

一役員として 市野沢弘子 21

「蓑虫」付勝練習二十韻 22

柏連句会 二十韻 捌 東 明雅・文 山田和久 24

四宮連句会 二十韻 捌・文 坂本孝子 25

逗子連句会 二十韻 二巻 捌・文 本屋良子 26

捌 加藤道子・文 式田和子 27

電通連句部 二十韻 捌 東 明雅・文 青木秀樹 28

雁帛往来・連句会案内 29

新刊紹介・「電通連句」 21

恋句は三句去り  
南柏雜誌記 23

雅

「連句研究」八十一号には俳諧の式目に関するアンケートの回答が特集されている。今泉宇涯・窪田薫・高畑自遊・柴崎正寿郎の各氏及び、連句研究会（鹿の会）としての式目案というものも拝見出来、興味が深かった。いずれも、それぞれの流派のやり方を発表されているが、それらは決して連句界全体を規制するものではないから、どんな事を述べられようが自由で、それに文句を付けようとは思わない。

しかし、気になることがないでもない。たとえば、今泉宇涯氏は、  
恋句は五句去二一三ヶ所、一箇所二一五句です。  
とされ、窪田薫氏は、  
恋句は五句去二一三ヶ所、一箇所二一五句続きがよい  
と言っておられる。  
高畑自遊氏も、  
恋句は五句去二、三ヶ所、一箇所二一五句続きで可

と、この三氏は全く同じ意見であり、表現もほぼ同じである。

私は「連句入門」（昭和五十三年刊）にも書いている通り「恋は三句去り、句数は二句から五句続く」という芭蕉以来の法式を守り、猫養会ではこれを実行している。「恋句五句去り」とは誰がいつ決めたのか。もし、三句去りが許されぬとなると、有名な芭蕉・越人の両吟「雁がねも」の巻（元禄三年）の名残表の三・四・五の一連、及び九・一〇・一一の一連はともに恋句である。これは恋句三句去りの最もよい例であると思うが、五句去りを主張される方々は、このところをどう説明されようというのであるうか。

恋句は一卷の中で特に目立つものである。だから、三句去りよりも五句去り位にしておく方が無難であると考えられる気持は分からぬでもない。しかし、現に芭蕉は三句去りでやっており、現代の我々でも、時と場合によっては三句去りで恋句を出す可能性もないではない。それをわざわざ五句去りにして窮屈にするのはいかがであろうか。

えにし 國島十雨

半歌仙 ちゝろ虫の巻

ちゝろ虫 浄瑠璃坂のくれかゝり  
どびろくの香の誘ふ月の出  
海廻し眼の青き子も交りあて  
画集繙く客去りし後  
小刀の缺けて古びし旅硯  
躑しつむツンドラの虹  
白銀の麦の穂蔭のかくれんぼ  
清姫の目が闇にバッチリ  
連句師の娘は異国人  
ゆがみてドアの開かぬプレハブ  
笛を吹く遠火事赤い空の下  
金鳥玉兎に古ぶ外套  
爺さまはノモンハンにて死にました  
ゲリラとなりて七生報國  
結体の仮名交り文隙廣く  
腹の足しにはならぬ陽炎  
聖母子の視線ひとしく花に向き  
仔猫転がす糸巻の毬  
昭和四十九年十月五日  
於 東京・市ヶ谷 南方子亭

國島 十雨  
東 明雅  
真鍋 天魚  
鈴木 三余  
高島南方子  
石川 宏作  
和田としお  
星野 石雀  
杉内 徒司  
お 子 雅 雀 作 雀 余 雨

市ヶ谷佐土原町一の高島南方子さんの邸は高級住宅地帯で裏が谷になっていた記憶だ。浄瑠璃坂なんて嬉しい名の坂があがってゆく時、太陽が沈もうとしていて、暮れ残る空が血のように美しく焼けていた。ちゝろ虫が鳴いていた。南方子さんは出版関係の方とか、明雅、徒司さんのほかは皆初対面の方ばかりだった。

食事をしながら、半歌仙をということになり、発句を求められた。固辞もならず、で、道すがらの一句を挨拶とした。明雅さんの脇の付けの通りにとびろくも出て来た。

それぞれ自己紹介、名刺交換をしたのだが天魚さん、石川宏作さんは作家、三余さんは大学教授、和田としおさんは新潮社勤務、石雀さんは俳句で名前は承知していた。私は田舎焦門、美濃派、獅子吼編集者、石田波郷の弟子でした、と挨拶した記憶がある。

私がこの半歌仙に仲間入りが出来たのは、明雅、徒司さんのお誘いがあった、厚生年金会館の芭蕉忌だったかに参加した、前夜の、つまり歓迎の座をつくって載いたのであった。

この年昭和四十九年八月三日に明雅、徒司のお二人が岐阜大学教授の鈴木勝忠さんの斡旋で、岐阜へ来られた。それは伊勢流のお二人が、嘗って支麦の徒と言われた、美濃派の探訪の旅に来られたのが因縁であるということだ。支考の獅子庵、歴代の鑑塔を御案内して、その夜青々園私の宅にお来し載き、珍客に美濃派の現況をお話したのであった。歌仙を巻こう、と明雅さんに発句をお願いした。

歌仙 涼しき邸の巻

降りたちて涼し泉の噴く邸  
ねてゐて小田の蛙きゝませ

民謡はみな五線譜に書きとめて

刈り揃へたる半白の髪

上弦の月に傾く糸瓜棚

手花火囲む帯長く垂れ

六波羅は市中の寺地藏盆

下略

以下は翌日、岐阜伊奈波神社参集殿で岐阜在住の連衆十名ほどをあつめて、満尾したのである。

さて、私の家で明雅さんの心をとらえたのは、泉噴く城の外濠と、私がお目にかけて、伝来の旅硯である。この旅硯と全く同形の硯が信州で見つかり、或る夜電話がかかって来て、この市ヶ谷へ持参する約束をしていたのである。南方子亭の座で、二人は旅硯を確かめたのである。明雅さんの硯は二種ほど大きかった。ちゝろ虫の巻の中へ、南方子さんの付けとして、旅硯がでて来たのは打坐即刻の付けである。

市ヶ谷の夜は、近くのホテルで、明雅さんと枕を並べて語り明かした。

美濃派は余り人情の自他は言いませんか？

はい余り言いませんね、もっとも三十三世を追贈された

足立吾柳宗匠の連句論に、少し出ていたが……俳諧連句は先ず坐れだ。と坐らされて、私など古老からは余り教えて

東	明雅
各務	於菟
杉内	徒司
鈴木	勝忠
伊藤	南川
沢田	廬月
國島	十雨

貰えなかった、職人が体で覚えたように……事実はそうでしたが……とまあ、こんな話をしたのであった。

明雅、徒司の二人さんとの出会いが、東京の連句の皆さんとの交流になって行ったのである。

和田としお、山地春眠子さんなどは、私が親戚の結婚式に参列していたホテル迄迎えに来られて、披露宴を脱げ出して一杯やったこともあった。

よき友ばかりで一生忘れられない思い出である。何時か、明雅、徒司、式田、秋元さんをお誘いして神田、淡路町の親戚の「万代家」旅館に於て、一座したことがある。

ニコライの鐘も師走の旅籠町

十雨

冬の紅葉のまだ朱き庭

明雅

の二十韻は、明雅さんの二十韻の最初の巻である。旅館の古田悦子が宇田零雨さんの草茎に所属しているのを一枚加えて、「五雲を望む万代の春」と徒司さんが座敷の額から裁ち入れて締めくくられた、その夜は二十韻満尾の祝盃をあげたのであった。それが猫養会の看板連句になろうとは思っていなかった。

私の獅子吼は四月に第六〇〇号の記念特集号を出し、明雅さんから「連句と伝統」の一文を戴いた。それは私との出会いから今日の連句界に対する考え方に及んでいた。

このごろの様な似而非連句の流行に対しては、かなり手厳しい大胆な表現で、蕉風連句をなつかしく思う言葉が述べられていた。

貴、猫養会の連句の御発展を心から期待するものである。

# 「鶯の羽も」の巻 鑑賞 (IV)

東 明雅

9

はきごころよきめりやすの足袋

何事も無言の内はしづかなり

去来

(現代語訳) めりやす足袋のはきごころのよいことよ。こうして何も言わず黙って暮らすと、世は静かで平穩なものである。

(付心) 前句の人の観想の句 (人生・世相その他に對する感慨を付ける) である。

(付味) 前句のめりやすの軽くて快適な柔軟性が、この人物の物に逆わない氣持、平穩・静和を愛する氣持に通っている。

(転じ) この場合、大打越 (打越の一つ前の句) ・打越・前句と、三句ほぼ同じ句境が続いたので、去来としては、どうしても何か転じなくてはならなかった。しかし、打越・前句、ことに前句があまりはつきりした自の句であるために、他の句へ転ずることが難しかったのであろう。前句に付ければ、前句の人の信條の独自めいたものにな

り、転じとして万全のものとはなり得ていないけれども、打越とくらべてみた場合には、打越の句の動に對して靜具象に對して抽象、風狂的な氣分に對して自足安悅の氣分と、相当に変化し、去来の苦勞の程は察せられる。

(補説) 以下は、全く私の想像である。前句にメリヤスの足袋が出たのは、この一座で長崎の人である去来が、メリヤスの靴下を履いていたのではないか。それを目敏く見つけた凡兆が、「随分履き心地がよさそうですね」とひやかしたのに、去来が応じたのがこの句ではなかったか。一座囀目の事実を直ちに作品に取り上げるのは、俳諧(連句)功者の常用する一手段だからである。才氣煥発の凡兆に對し、むしろ重厚な去来が、せい一ぱいの努力で何とか答えよう、何とか転じしようとした様子が偲ばれ、ほほえましいが、実際に証拠を上げよと言われると何も無い。だが、そこまで想像して句を味わうのも楽しいし、鑑賞ならば、そのようなことも許されると思う。

さらに、この句で打越から三句人情自の句が続いている。北枝(？)一七(一八)の「付方自他伝」によれば、人情自

も他も二句は続けられるが、三句続け、あるいは打越に自または他が出ることは誠めている。これは句境に転じがなく、輪廻になる恐れがあるからである。もちろん、この「蕨の羽も」の巻の連衆には自他の意識はあったと思われるが、まだその続け方にはっきりした規則はなく、「付方自他伝」そのものが、この歌仙完成後二年たった元禄五年（一六九二）に作られたものである。だから、たとえ、人情自がどのように三句続けられても、その三句の間でそれぞれ変化し、転じていけばよいという考え方であったようだ。だから、この一卷は、三句以上、人情自の続くところがこれからもあると思うが、その際は、同じ人情自の句の中で、どのように三句の転じが行なわれているか、その点を注意して欲しいと思う。

10

何事も無言の内はしづかなり

里見え初て午の貝ふく

芭蕉

(雑。人情他)

(現代語訳) 無言の行を終わって下山する山伏たちは、里が見えそめた時、昼を知らせる法螺貝を吹きならし賑かになつた。

(付心) 前句の「無言の内は」を山伏たちが行なう「無言の行」と見て、その山伏の吹く法螺貝の音を付けたもの。このような付け方を心付という。

(付味) 前句の静寂に対し、喧騒のコントラストである。

は前句の作者去来が果し得なかつた一卷の気分の転換を鮮かにしたとともに、事柄を山伏の行法のみに限らず、「里見え初て」というように世界をひろく、庶民の相へ転じたことよって、次の作者が作りやすいように配慮している。まことに一座を捌く者としての力量の大きさに感嘆せざるを得ない。

11

里見え初て午の貝ふく

ほつれたる去年のねごのしたゝるく

凡兆

(雑。人情無)

(現代語訳) 山路から里の見える所までくると、昼を知らせる貝の音が聞こえる。その辺の家で休ませてもらったが、糸のほつれかかった寝蓆は昨年からのものか、いやに汚れてしめっぽかった。

(付心) 其場の付。

(付味) 前句の里と、付句のねごはよく位が合っている。逆に言えば、前句の里から付句の位が導き出されたもので、これを見ても、前句を作った芭蕉の力は偉大である。(転じ) まいら戸の句から、めりやすの足袋をへて、何事も句まで続いてきた気分が甚だ庶民的な気分の一転されている。

(補説) ねごは寝蓆で、寝蓆と同意。今日は夏の季節になつているが、元禄のころは、夏だけでなく、一年中、庶民の敷蒲団用として用いられた。「物のせはしき世渡り

(転じ) 打越がひとり晏如と暮らしている感慨を述べているのに対し、この句はいかにも元氣な山伏たちを登場させ、気分を一転し、一卷に活気が漲つて来た。

(補説) 「午の貝ふく」は午の刻の合図に法螺貝を吹くのであるが、その吹く人を山伏ではなく村人が吹くのだという説がある。伊藤正雄氏は「芭蕉連句全解」において、修験者が時を報ずる貝を吹くというのは不自然であるとし、

「現在も大和三輪地方の農村では、午の貝を吹いて正午の休憩時を知らせ、全村一斉に昼食後、暫く午睡をとり、二時に再び貝を吹いて、午後の農作業に入る習慣がある」と紹介しておられる。しかし、この付合が、前句の静に対する付句の騒のコントラストに興味があるとするならば、村里の時報と見るより、修験者(山伏)の吹く貝と見た方がよりその対照ははつきりし、効果的であろう。

村里で貝を鳴らすのがすぐ騒がしいとは考えられない。それよりも山伏たちが里が見えそめたのをききかけに、休憩・昼食の合図として法螺貝を吹き、同時に無言の行も解いたとするならば、その方がより活気に溢れ、おもしろいと思われるからである。

山伏が時を知らず貝を吹くのはおかしいというけれども、当時の時報は大きっぱなものであり、太鼓・鐘・法螺貝といろいろな道具を使って知らせたのである。前句を山伏と見る限り、法螺貝は山伏と付合語の一つとなつていているから、やはり山伏がこの貝を吹いていると見るべきであろう。

この句よって、一卷の気分が見事に転じられた。芭蕉

の中にも、夫婦の語らひを榮しみ、南枕に寝延しどけなくなりしは、過ぎつる夜、甲子をもかまはず、何事をかし侍る」(「好色五人女」巻二)

したゝるくは湿気をふくんでじめじめしているさまをいうが、仮名草子「犬枕」に「したたるきもの」に「相惚れの目元」。「露によごれたるきる物」をあげてある通り、べたべたと色気たっぶりの形容にもなる。

而して、この寝蓆はどこにあったものか、また誰が用いたものかについて、①雨か霧の晴れ間に干した様 ②旅人が雨具として借りたもの ③道の小家のもので旅人が腰をかけたもの ④貧しい村人が昼寝に用いるもの ⑤山伏に跨いでもらう為に道に敷いてあるもの、の大体五つの説があるが、村里の寝蓆の汚れてじめじめしているのを強く感じるのは、その村人でなくて、やはり旅人であろうし、その旅人も山伏に関係したものと見ると、三句がらみになるので、普通の行客と見たい。やはり、曲齊が「七部婆心録」に言うように「コハ都人ならむ。午の貝がなれば昼飯せむと、とある家の椽かるに、里人の真心に、旅客を会釈し、そこは埃にあえたれば、暫待給へと、寝蓆一枚持出るを見るに、煮染のごとく色付たれば、イヤお構下されなと断れども、強て敷けば、せびなく尻浮て腰掛ながら、したゝるく思ふ様也」と見るのが一番妥当であろう。

寝蓆。したゝるく、ともに何か次に恋句を誘う気分が感じられる。峯入行者が大和洞川辺で精進落しをする話、(「好色一代男」巻二ノ七参照)も思いあわされ、屋下り

の情事ではないけれども、すくなくとも凡兆はここで「恋の呼び出し」をしていることは十分に考えられるところである。

12

はつれたる去年のねござのしたゝるく

芙蓉のはなのほらくとちる

史邦

(夏。芙蓉のはな。人情無)  
(現代語訳) 去年から使い古しの寝蓐座は汚れ、糸がはつれている。その上で寝ていると、折から屋外の蓮の花がほらはらと散る。

(付心) 通句的な其場の付け。

(付味) 移り。「古び萎えた湿っぽい寝蓐座の、破れはつれた前句の家の内なる気趣を、蓮花の崩れ散る家の外の趣に軽く承けたのである。それと共に、前句に表象せられる佗しいす汚さに対して、生彩を与へ美化したものである。『俳諧古集之弁』に『浄穢のとり合せいとおかし』と見てゐるのもその意であらう。このやうに前句の表象に暗示する気趣を付句の表象に移動させ、その感じの交融する処に付運びの重心を置く付肌が『うつり』の名目で呼ばれて居る。『うつり』は移りであると共に、又二句の情趣の照応をいふ映りの義でもある」と天野雨山は「猿蓑連句評釈」に説明している。付肌とは付味と同意である。

(転じ) この句は純叙景の句であり、水辺の蓮の花の美しさを描いている。その点、打越の人臭い景からは全く別

ける。この場合は、主客がいるわけであるから、人情自他半である)。

(付味) ほらはらと散る蓮の、気高く清い風致は水前寺海苔の高雅、淡白な味と匂いあっている。匂いの付であり、位の付でもある。

(転じ) 打越の汚れ湿った寝蓐座の句から、全く清浄無垢の世界と、大きな転じが見られる。

(補説) 吸物とは、酒の肴としてのつゆものを指し、御飯とともに飲む時は「汁」と言つて吸物とは言わない。有名な元禄七年八月十五夜の芭蕉無名庵の献立表を見ると吸物は二回出ており、まず酒盛の初めに「つかみたうふ」の吸物、そして最後に御飯を出す前にも「松茸」の吸物が出ている。これによると当時の客振舞には二度吸物を出し、酒をすすめていることが分る。「先出来されし……」は、これからどんな珍らしいものが出てくるかと期待させるに十分なものが、宴の最初に出て来たことを賞美した意である。

すいぜんじとは水前寺海苔。熊本市出水町にある水前寺公園は、江戸時代、藩主細川家の別業成趣園の跡で、昔はここで藍藻類の淡水藻が取れ、水前寺海苔として、淡白な風味が賞美され、精進料理の高級食品として有名であった。この水前寺海苔は、寺院・あるいは茶会などを連想させ、芭蕉はこの句によって、打越・前句にもやもやしていた一種のなまめかしい気分を払拭してしまつた。

の世界を描き出して、気分も転じている。

(補説) 「俳諧初学抄」などでは芙蓉の花を初秋の季語として居るが、これは木芙蓉のことで、これはほらはらとは散らない。中国では芙蓉は蓮の花であり、蓮の花は同じ「俳諧初学抄」では末夏の季語としている。この句も前後に秋の季語がないところを見ると、夏の蓮をさしていることは明かである。

芙蓉花は「長恨歌」にも「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳似眉」とあるように、芙蓉姿・芙蓉面・芙蓉之眸などみな古来美人の喩として用いられ、なまめかしいところがある。私は前句のねござ・したゝるしなど、この付句の芙蓉の付合に、軽い色気を感じる。それが移りであると思う。

凡兆は前句ではっきり恋句を誘っている。しかし、史邦はそれに真正面から応じないで軽くなした形になっている、これが通句の特徴である。この巻の前半に恋句が見られないのはやや寂しいが、それは史邦の責任である。

13

芙蓉のはなのほらくとちる

吸物は先出来されしすいぜんじ

芭蕉

(雑。人情自他半)

(現代語訳) 池畔の小亭ではほらはらと散る蓮を見ながらの宴、出された吸物の水前寺海苔の淡白な味を、客は満足して、まず第一の亭主のお手柄と賞美する。

(付心) 起情(前句の人情無の句に応じた人情の句を付

14

吸物は先出来されしすいぜんじ

三里あまりの道かゝえける

去来

(雑。人情自)

(現代語訳) この水前寺海苔のお吸物は本当に結構でした。私はこれから三里の道のりがありますので、これとと辞去しようとする。

(付心) 向付。前句の立派な亭主ぶりに対し、立派な客の挨拶ぶりを付けたもの。前句の人物に対して、付句で別の人物を出して付けるのを向付という。

(付味) 軽い句の応酬であるが、亭主のもてなしぶりの鮮かさに対して、酒を切り上げる客の挨拶の鮮かさ、これは移りである。

(転じ) 打越の芙蓉の花の清純さに対し、この句は雅から俗への変化が見られる。

(補説) 「三里あまりの道かゝえける」という言葉が、どうして「酒をきり上げる」よい口実となり、鮮かな客の挨拶となるのか。それには、「三里ばかり」という語が、当時の人たちに、どのようなイメージを与えたかを考えなければならぬ。一般的に言つて、当時の人たちは歩くことに馴れていた。馬や駕籠の外にはこれといった乗物はなく、馬や駕籠でさえも、多くの庶民は常に利用できるとは限らなかつた。この点、ちょっとした所にも車を利用し、歩くということが全くなかつた現代人の意識とは異なる。酒機嫌旅の板屋も一里程(元禄五年「月代を」の巻)

壹里や貳里の路は朝の間(元禄七年「水鶏なくと」の巻)

というような句もあって、一里や二里ならば全く問題にならない短い距離と考えられていた。だから、逆に言えば一里または二里では酒を切り上げる理由にはならないのである。

そして、これが三里となれば、やや、状況が変わって来る。福井は三里計なれば、夕飯したためて出るにたそがれの路たどくし(「おくのほそ道」)

とあるように、客が「これから三里行かねばならない」と言ったら、主人はもう無理には引きとめられないけれども、さして心配になる程の距離ではなかったのである。それが、吸物を出した主人の心遣いに対する客の心遣いなのである。

この句の解釈、旧注にはあるいは客が急ぐ意に取り、気ぜわしい気分とし、極端なものは「隙とりてめいわくなるの意に転ず、先の字をとがめていへり」(俳諧古集之弁)などと解するものもあるが、そのような気分には解釈しては

付味がおもしろくない。

さきに打越の句と付いた時の吸物は例の芭蕉の献立に見る第一の吸物(つかみだうふ)にあたるところと言ったがこの付句では二番目の吸物(松茸の箇所にあたる)に、見立替えをしている。

二番目の吸物が出ると、宴もそろそろ終りに近づく、客としては適当な機をとらえて酒を打ちきるように才覚しなければならぬ。

この付句は、そのために最も適切な理由を述べたまでであり、別に急いでいるわけでも気忙しい気分も本当にはないのである。

「先」という語も、ここでは単なる感動詞的に用い、「これはこれは」とか、「本当に」とかの意に、これも見立替えされている。

か、えけるは、余情を残した表現であろうが、「はら／＼とちる」と、留めが「る」の字の打越になっている。これは今日の実作なら嫌われるところであろうが、当時としては許されたものか。かと言って、「けり」では強すぎるのである。

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、

九月十日(日)までに一卷につき三部ずつ呈出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

### 武翁賞作品募集

A・C・C実作 歌仙二巻

## 初講座 秋元正江捌

## 連句講座実作 東明雅

芽おこしの雨にけぶるや初講座  
チヨークの音のひびく春陰  
拾ひ来し小鳥の卵手の中に  
縄跳びの子のふたり飛入り  
整文様薄るる宵の月  
おみやげに持つ舞茸の籠

久美子 濱  
雅代  
啓世  
和子  
あかり

ロザリオ祭ぬかづくうなじ深々と  
その罪問はば仄と紅  
おとつと君は誰にも渡さない  
ごきぶり人形叩く快感  
逆輸入アメリカ産の国産車  
レミーマルタンまたも乾杯  
月涼し門限の扉よちのぼる  
朝顔ひとつからむ箱庭  
相統に俄か養子のぞろり殖え  
羅漢そっくり友の微笑み  
埋没のダムのはとりの花大樹  
海上遙か蜃気楼たち

元子  
千町  
清子  
利子  
麻子  
光子  
美灯子  
同  
淳子  
正江  
千雪  
杉亭

朝日カルチャーセンター(A・C・C)の連句講座(実作と理論)は、昭和五十六年四月に開設されたから、今年はもう八年目に入った。昨年度からは私の外に、主として実作の指導者として秋元正江さんを迎え、いよいよ内容が充実して来た。

上に掲げた歌仙二巻、「初講座」の巻・「秋しぐれ」の巻は、この教室で秋元さんが指導し首尾されたものである。教室で連句を作ることには、大へん難しいことである。たとえば普通の俳席にくらべて、まず連衆というか受講生の数が圧倒的に多いことである。普通の俳席で歌仙の場合は六・七人が最適で、十人以上になるとちょっと扱いに困る。それが教室では二十数人であるから、取扱いが面倒なのは自明の理であろう。一巡(一度句を採用された人は、全部が採用され終るまで、再採用されることを遠慮する)のルールがあるから、二十数名が一巡するまでは滅多なことでは採用されない。これが捌け者に取っても、捌かれる者に取っても一つのネックである。

次に時間の問題である。一句を治定する為には、各人に句を小短冊に書いて貰って提出させ、その句を黒板に書き

眠りたるままの仔猫を預りぬ  
うちの婆さん食が細くて  
ちんどん屋安売チラシ配る街  
懐手して波郷忌の午後  
寒病棟妻に触れずて久しかり  
燃えあがる恋うつつなりしや  
ひと型になり魚になる流れ雲  
シャボンのマーク尖る三日月  
部屋の間やと捕へしかまどうま  
ことしも無事に生見玉終へ  
曲れない潜水艦に御用心  
私立文系数Ⅲはなし

現代はおもちゃとなりしコンピュータ  
馬刺が好きで阿蘇に住みつく  
孫の名もすっかり忘る大世帯  
色紙に箔の霞たなびく  
花びらのふりかかりある休み窯  
旅ゆくわれに鳴きたてる雉

昭和六十三年四月十三日 起首  
昭和六十三年九月十四日 首尾  
於 A・C・C 連句教室

淑子 澄子 好敏 房利 達子 一恵 よしえ 弥生 弘子 徒利 明雅 江町

秋しぐれ 秋元正江 捌

秋しぐれ駅に角川文庫買ふ  
ことしまだ見ぬ十月の月  
両の手を合はせ鳩吹く獺師ゐて  
雑種ながらも耳立てる犬  
バザー用サロン前掛縫うてをり  
炬燵囲みし子等のなぞなぞ  
雪下しすみたる屋根の黒々と  
紅さし指にばちちりと棘  
AとB恋の秤のさだまらず  
アシユレの他は振りむかぬ女  
貸しビデオ値引き合戦たけなはに  
捕へし蝮塚に漬けこむ  
仰ぎみて馬籠奈良井の夏の月  
字の薄れたる万葉の歌碑  
代議士は名刺ひときは大きくし  
ラジコン飛行機自由自在よ  
鉄鉢に御喜捨の米と花びらと  
杭にかたまる蛭二つ三つ

利子 澄子 杉亭 雅代 千町 淑子 あかり 和子 正江 よしえ 徒代 清子 久美子 好敏 淳子 濱

「秋しぐれ」鑑賞

「山上宗二記」に、茶ノ建前ハ無言。次ニ亭主振リノ事、心ニ成程客人ヲ敬スベシ。貴人ノ茶湯上手ノ事ハ云フニ及バズ、常ノ参会スル人ヲモ、心ノ底ニハ名人ノ如クニ思フベシ。  
とあります。一巻の鑑賞は読者にまかせて捌きは無言でいたいのですが、茶事の客が帰った後、心しずかに自服の茶を点て庭を眺める気分で、巻き終った「秋しぐれ」の余韻と過ぎにし日の緊張と興奮をふり返ってみました。  
明雅先生の連句鑑賞規準を胸に、  
一、一句一句のおもしろさ。  
二、前句と付句との間に生まれる付味のおもしろさ。  
三、三句目の転じのおもしろさ。  
四、一巻全体の議成とその変化、調和のおもしろさ。  
(一) 変化がなめらかに無理なく行われているか。  
(二) 現代社会をえがいて偏らず描写に新味、面白味があるか。  
(三) をかし(滑稽)、しをり(哀憐)があるか。  
を考えてみました。  
秋しぐれ駅に角川文庫買ふ 利子



孕鹿やはらかき土歩むなり  
質屋を知らぬいまの学生  
廃兵の縁のほつれし巻脚絆  
おっとどっこいこの線のうち

湯豆腐にいつしか笑みのしどけなく

離婚結婚たしか四五回

鈍感の雑魚ばかり釣るこの辺り

台湾へとぶ話煮つまる

短銃を入れたる鮑月を浴び

鯛の鳴く脊戸のうら山

今は亡きはらからと酌む温め酒  
無位無冠なり前衛の書家

はたはたと平成の絵馬風に揺れ

返した傘をまた借りてゆく

診察券どこへ忘れて来たのやら

理髪屋のどかすべるバリカン

篝守灯しそめたる花の下

縄で作りし低きぶらんこ

昭和六十三年十月十二日 起首

平成元年三月八日 首尾

於 A・C・C 連句教室

元 啓 千 達 志 明 弥 弘  
和 澄 恵 子 雪 恵 子 生 雅 子 江 子  
司 敏 淳

ことしまだ見ぬ十月の月  
発句は、さりげない駅風景に、文庫本を買うという心の  
弾みが、秋の講座はじめの教室全員の気持をよく表わして  
いました。

脇は、秋しぐれの発句に趣向を凝らした月が沢山でまし  
たが、この巻の年の気象の記録にもなり、「梅が香」の巻  
の芭蕉の句を思わせました。

貸しビデオ値引き合戦たけなはに

捕へし蝦蟇に漬けこむ

仰ぎみて馬籠奈良井の夏の月

質屋を知らぬいまの学生

廃兵の縁のほつれし巻脚絆

おっとどっこいこの線のうち

澄子 雅代 徒司 清子 好敏 徒司 和子

はたはたと平成の絵馬風に揺れ  
返した傘をまた借りてゆく  
診察券どこへ忘れて来たのやら  
理髪屋のどかすべるバリカン  
篝守灯しそめたる花の下  
縄で作りし低きぶらんこ  
転じ、をかし、しをり、を味わってみて下さい。捌きと  
して、常に参会する人をも心の底に名人の如く、教室の連  
衆をもてなすことができたかと、例年より早かった花が散  
って藤に移るこの頃、またこの一巻を眺めております。  
(正江)

# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

## 第二十九回 猫蓑会

第二十九回猫蓑会は四月二十五日(火)、江東区亀戸天  
神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興  
行、奉納し、そのあと、二十韻九巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「梅の核」一巻

第二部 二十韻九巻

(一) 役割

宗匠	杉江	杉亭
脇宗匠	中川	哲
副宗匠	中島	啓世
執筆	秋元	正江
知司	福井	隆秀
副知司	式田	和子
副知司	市野	弘子
座見	矢島	房利
座配	雑賀	遊
花司	滝川	雅代
配硯	金久保	淑子
老長	東	明雅

(二) 次第

- 一 席改め (知司の指図により座見・座配の役)
- 二 席入り (知司・座配)
- 三 配硯 (重ね硯を配る)
- 四 献花 (花司)
- 五 執筆登場 (執筆)
- 六 文台捌 (執筆)
- 七 知司挨拶 (知司)
- 八 俳諧興行 (執筆・連衆)
- 九 花前 (執筆)
- 一〇 玉串奉献 (宗匠)
- 一一 花の句 (宗匠)
- 一二 端作り (執筆)
- 一三 吟声 (執筆)
- 一四 文台返し (執筆)
- 一五 作品奉納 (執筆)
- 一六 挨拶 (知司)
- 一七 退席



藤祭り

副島久美子 捌

文台の捌きあざやか藤祭り  
久美子  
翅音を軽くめぐる姫虻  
清子  
陽炎の中の一人となりてゐて  
房利  
コッフェル出して沸かすコーヒー  
よしえ  
若作りアロハシャツ着て色眼鏡  
房利  
又瘦せたねと肩を抱かるる  
清  
堅石の擦り減つてゐる雪の宿  
え  
冬濡洗ふ磯照らす月  
同  
仕手株に三日大尽生れたる  
清  
ソフアーによりて紫煙くゆらす  
え  
幻の卑弥呼の里か吉野ヶ里  
清  
土をせせりてさわぐ雀ら  
美  
もてすぎる色浅黒き美少年  
利  
何でもないとあの娘あざむき  
清  
月の出の夜々に運るるひそけさよ  
え  
新酒にうるか宅急便にて  
同  
来し方と行く末思ふそぞろ寒  
利  
「古今和歌集」ひさびさに読む  
清  
巡礼の花の下より現はるる  
え  
猫が横切る春泥の道

藤の浪

豊田好敏 捌

下町のかほり連ぶや藤の浪  
好敏  
せんべい返す手振永き日  
麻子  
メーデーの列に幼児加はりて  
美智子  
居間のテレビは音だけを聞く  
弥生  
暮会所の二階に果食ふ天狗連  
敏  
噴水池に映る薄月  
生  
逢引は又待たされて枇杷の影  
智  
持てるお医者ちよっと藪なり  
敏  
次々と巳年の赤子生れてる  
生  
お祝ひ金にきしむ家計簿  
麻  
九月蚊帳バンガローには虫多し  
智  
せせらぎの辺に鶺鴒の声  
麻  
望くだり別れの予感抱きしめる  
生  
ワイングラスに粟一粒  
敏  
讚美歌の五百十番開かれて  
智  
生きた化石のやうな顔つき  
生  
わが国のサッカーファン紳士なり  
敏  
観光バスのバックオーライ  
麻  
弘前の城趾公園花万朵  
生  
春野遊びの囀達ゆく

白藤

中田あかり 捌

白藤の房の短かき水面かな  
あかり  
押されて渡る柔東風の橋  
利子  
燕の巣子等は爪立ち仰ぐらむ  
雅代  
郵便配達あける裏木戸  
哲  
のみさしのレミー・マルタン夏の月  
達子  
蛇の恋淡きまなる  
哲  
からませし小指と小指物を言ひ  
哲  
一時間ほど来ない汽車待つ  
利  
辞任表明きいてころりと同情し  
達  
ドクタイストップ煙草さよなら  
同  
雲ひくく冬濡よする牧師館  
哲  
徹夜原稿水下魚噛みつつ  
利  
牛生まる根釧原野人往き来  
哲  
やっともらった南国の嫁  
利  
二日月あのでぞく蟪蛄の翅  
哲  
ルーベでのぞく蟪蛄の翅  
同  
烏瓜ぶらりとさがる閻魔堂  
利  
電子音楽突如とまりぬ  
代  
出稼ぎの父から届く花便り  
利  
菜飯ほかほか皿に盛りつけ  
達

藤まつり

馬場彬風 捌

亀戸や天満宮の藤まつり  
彬風  
春の大前ささぐ俳諧  
みづゑ  
遠足の子等が手を振る車窓にて  
弘子  
煙草くゆらし石に腰かけ  
一恵  
金魚鉢月の光に輝きぬ  
同  
浴衣に着替へ睦が嬉しさ  
風  
あなたの名何時になつたら名のれるの  
子  
海外出張つひに三年  
え  
東京はインテリゼントのビルばかり  
子  
ふるさと創生辻の説法  
風  
竹藪に筍ならぬ金を掘り  
え  
狸ばかりが増える世の中  
恵  
ほろ酔の父帰ってくるしはぶきよ  
子  
トイレに彼をかかす早わざ  
風  
トイレに彼をかかす早わざ  
同  
嬉曳は素知らぬ顔の月ながめ  
同  
そっと出されしままかりの鮎  
え  
収穫の空にこだます鳥をどし  
子  
ジョギングシューズ竿に干さるる  
子  
切り通しぬけて万葉の花盛り  
恵  
弥生の山を画く人々

撫牛

原田千町 捌

撫牛の座る神苑藤香る  
千町  
朱の反り橋生まれつぐ蝸蚪  
啓世  
おもたせの三寶柑を大皿に  
杉亭  
ジグソーパズル興ず子供等  
道子  
蓼科のサマーハウスを照らす月  
亭  
籠枕して添寝する仲  
世  
恋の沙汰みそかごとこそ極みとや  
世  
文庫本にて探す西行  
淑  
消費税面倒臭くややくしく  
町  
次回五輪はバルセロナなり  
淑  
烟酒を廻す友垣法螺談義  
亭  
戦のことは夢のまた夢  
世  
けふも又托鉢の僧駅頭に  
世  
ありと思へぬ養虫の愛  
淑  
幻月の掛かる木の間にペーゼして  
道  
芸術祭に田園を指揮  
同  
魚の目のだんだん育ち足をひく  
道  
老の水仕のままごとと似る  
町  
花びらの權持つ人に降りかかり  
亭  
雲雀舞ひ立つつひんがしの空  
道

藤垂るる

吉澤てるよ 捌

藤房の垂るる池の面幽かなり  
てるよ  
亀甲羅干すかぎろひの石  
光子  
大掃除時わかずして終るらん  
徒司  
こんべい糖を舌にころばせ  
昌子  
白き帆を操る人に月涼し  
澄子  
無理して贈るシャネルの五番  
光  
君だけは裏切れないと耳元に  
光  
疑惑の議員すぐに入院  
澄  
由緒ある老舗は消えてビルの街  
澄  
ピアノの上に眠る三毛猫  
光  
独吟の連句名残りに移りたる  
澄  
午後の予定は映の探梅  
澄  
竜神の激しき恋は凍滝に  
澄  
志功の彫りし女菩薩の胸  
澄  
月夜良し酒も味佳し紅葉よし  
澄  
落鮎を焼く粗朶を集めて  
澄  
文化祭昔の友と村芝居  
澄  
ホームの空缶拾ふ駅長  
澄  
満開に咲けばこれより花の家  
澄  
春の灯ともす奥の書院に  
澄

